

「意味を廻るサッカーとメディア@サイバー空間」
Soccer and the media @ cyber space coil around a meaning
1K03b027-0 岩谷 聡徳
指導教員 主査 リー・トンプソン先生 副査 菅田 雅彰先生

1、研究の動機、目的、方法

研究の動機は興味と不信である。何に対してか。サッカーとメディアと言語に対してである。現在、サッカーとメディアには互いの商業的發展のための相互依存関係が築かれている。メディアと言語の間にも同じような関係性が見られる。そのこと自体の是非はともかく、その関係自体を客観視し相対化する視点の欠如、あるいはそういった視線の存在感の薄さには失望を伴った危惧を抱いていた。そんな折、次々と昨今のサイバー空間に立ち現れて来る新たな表現形式とその場が、こういった現状を打破する可能性を秘めているのではないかと考えるようになった。そこでその可能性を検証するため、編年の記述という方法論を採用してテクノロジーの進展とそれに触発される形で現前してきた思考様式を、サッカーとのかかわりの中で叙述していく。理論と現実をリンクさせながら総論と各論を繰り返し検証を積み重ねていくこととしたい。サッカーを検証の題材に選んだのは世界的に普及しているという観点からと、日本におけるインターネット網の発達＝サイバー空間の建設と日本でのサッカー人気の高まり＝サッカーという共通言語を通じた世界との接続、時期が照応関係にあるという判断からである。

2、各章の要約

序章では研究の動機と目的及び方法及び各章の要約を簡単に述べた。内容上この要旨で述べたものと重複する部分もあるがあえてそうした。なぜなら本稿は読み方によっては構成上多少読みにくさを伴う可能性があるからだ。ただしそれは戦略的なものであり、読み手に俯瞰的メタ的思考という地図をもたらすものと考えている。

一章では「言葉時代」を取り扱う。サッカーとサイバー空間の結託の開始を、時代の寵児中田英寿氏が自ら立ち上げたホームページ「**nakata.net**」の開設に照準する。選手という一個人から既存のマスメディアに対して表明された異議申し立てを支持する人々の出現を最初の支持基盤に、次第に開かれて

いく議論の場としての掲示板と固定ハンドルネーム文化を2ちゃんねる・名無し文化との対比で浮き彫りにする。当然切り離せないサッカー界の象徴的な動きも適宜挿入しながら、主に言葉をその表現手段として採用した時代を「言葉時代」と名付けた。

二章では「ポスト・言葉時代」の幕開けを言葉以外の表現手段の拡充を通して検証する。その際前景化する「共有」と「コピーレフト」のつばぜり合いを「ソーシャル・ネットワーキング・サービス」の嫡子としての「mixi」の特徴を「2ちゃんねる」の比較検討を通じて明らかにする。そしてそれらの大きなバックボーンとして「WEB 2. 0」という思想をとりあげ、その是非を考察する。さらに、その負の側面として懸念される「スケールフリーネットワーク」の抱える問題点を解消する光明を「リズム」という思考形態を取り上げながら考えたが、結果として情報の中に世界が取り込まれるという逆説を生きてしまっている現代の情報環境に行き当たった。

終章では、重心を概念的なものに移して論を展開する。それはテクノロジーの教師的な発展速度との関連で語るのにまだサッカーを取り巻く言説が追いついていないために採らざるを得なかった苦肉の策である。あらゆる分野でテクノロジー開発の過当競争にある今日において、テクノロジーの供給が常に先行する一方、つきまとう影として倫理や犯罪といったものが存在する。さらに、もう一つメディアそのものを語ることの困難が存在する。そこでそもそもメディアなるものが媒介するものとは何であったのか。代表的なメディアとしての言語から非言語へのヘゲモニーの移行をサッカーを基本線にして考えていくと、どうしても判断主体たる自身の軸にたち帰らざるを得ないことに気付く。それを看過してはそもそもが困難なメディア語りに最低限の基準すら仮定できないからだ。そのことを踏まえたうえで、さらに悲観論に陥らずに「意味」というものを捉え、判断していくための基準となるモデルを提案することと試みた。それが成功しているかどうか判断するのは受け手と時代である。